

左義長まつり

「左義長まつり」は 400 年以上の歴史を持つ、華やかでドラマチックな祭典だ。近江八幡に春を告げる、毎年行われるこの祭りの目玉はその年の干支をあしらった高さ 8m の「左義長」である。その装飾は豆や穀物、魚のあらや昆布など、食べられるものだけで作られているのが特徴だ。装飾に食べ物を使うのは、前年の収穫に感謝し、今年も豊作であるようにという願いが込められている。

カラフルな法被を身にまとった賑やかな集団が左義長を担いで町を巡り、2 チームの押し合いである「けんか」と呼ばれる力比べが行われる。クライマックスでは、左義長を燃やして神に供え、その炎のまわりを参加者が踊り歩く。また、左義長を担ぐ人の中には、派手な服装に派手な化粧、鮮やかな色に染めた髪をする人もいるのが特徴である。これは、戦国武将の織田信長（1534-1582）が、自らの本拠地である安土城の築城を祝って、近くの安土で始めたと言われる伝統を受け継いでいるのだと言われている。

左義長祭りは 1 月に日本全国で行われ、通常、正月飾りを焚き火で燃やし、年末年始の祝福を携えて家を訪れると信じられていた神々に別れを告げるものである。信長が始め、近江八幡の人々が続けてきた「左義長まつり」も、もともとは旧暦の 1 月（太陽暦の初春）に行われていたが、19 世紀末に日本が太陽暦を採用してからは 3 月に行われるようになった。

左義長まつりは、各左義長が特定の町の住民によって作られ、運ばれるというコミュニティの誇りの表現である。また、左義長の豪華絢爛な姿と規模を商家の資金力が可能にしたものであるため、近江八幡の商業の歴史も反映している。国選択無形民俗文化財であり、3 月 15 日に近い週末の 2 日間にわたって行われる。それ以外の時期には、近江八幡文化伝承館と旧伴家住宅で装飾の複製が展示されている。